

..その28 ひふみ神示9 月光の巻き サブタイトル祓いと調和

木にも竹にも石にも道具にもそれぞれの霊が宿っているのである。人間や動物ばかりで無く、全てのものに宿っているのである。宿っているのであると云うよりは、霊と体とで一つのものでできあがっているのである。一枚の紙に裏表あるようなもの、表ばかりのものも無い。裏ばかりのものも無い道理。数字にも文字にもそれぞれの霊が宿っており、それぞれの能しているのであるぞ。順序がわかれば初段、和にてすれば名人。

山も自分、川も自分、野も自分、海も自分ぞ。草木動物悉く自分ぞ、歡喜ぞ。その自分出来たら天を自分とせよ。天を自分にするとムにすることぞ。〇に化することぞ。ウとムと組み組みで新しきムとすることぢゃ。

払いは結構であるが、役はらいのみでは結構とはならんぞ。それは丁度、悪を無くすれば善のみの地上天国が来ると思って、悪を無くすることに努力した結果が、今日の大混乱を来したのと同じであるぞ。

よく考えてくだされよ。善と申すも悪と申すも、みな悉く太神の肚の中であるぞ。太神が許し給えばこそ存在しているのであるぞ。この道理よく会得せよ。

はらうと申すのは無くすることではないぞ。調和することぞ。和して弥栄することぞ。

厄も祓わねばならんが、福も祓わねばならん。福祓いせよと申してあろうが。厄のみで祓いにならん。福のみでも祓いにならん。厄払いのみしたから今日の乱れた世相となったのぢゃ。このわかりきった道理が何故に判らんのか。悪を抱き参らせよ。善も抱き参らせよ。抱くには〇にならねばならんぞ。

心の入れ替えをせよとは、新しき神界との霊線をつなぐことぞ。そなたは我が強いから、私の強い霊界との交流がだんだんと強くなり、私の虫が生まれて来るぞ。私の病になって来るぞ。その病は自分ではわからんぞ。訳のわからん病流行るぞと申してあるがそのことぞ。肉体の病ばかりでないぞ。心の病はげしくなっているから気づけてくれよ。人々にもそのこと知らせて共に栄えてくれよ。その病治すのは、今日までの教えでは治らん。病を殺してしもうて、病を無くしようとして病は無くならんぞ。病を浄化しなければならん。悪を殺すという教えや、やり方ではならんぞ。悪を抱き参らせて下されよ。

考えていたのでは何も成就せんぞ。神界と交流し、神界に生き、神界と共に弥栄すればよいのぢゃ。

人間だけの現実界だけで処理しようとするのが今までの考えぢゃ。今までの考えでは人間の迷いと申してあろがな。迷いを払って真実に生きよ。みたましづめぢゃ。神しづめぢゃ。そなたは信仰

のあり方を知らんぞ。長い目で永遠の立場からの幸せが、歓喜がおかけあるぞ。局部的一時的にはいやなことも起こって来るとぞ。天地を信じ、自分を知り、人を理解するところにこそまことの弥栄あるぞ。だますものにはだまされてやれよ。ひとまずだまされて、だまされんように導いて下されよ。そなたはそんな場合に我を出すからしくじるのぞ。だまされてやろうとするからカスが残るのぞ。まことにだまされる修業が大切ぢゃなあ。

そなたはつまらんことに何時も心を残すからつまらんこと出てくるのであるぞ。心を残すということは、霊界とのつながりあることぞ。つまらん霊界にいつまでくっついていちゃ。何事も清めて下されよ。清めるとは和することであるぞ。同じもの同士の和では無い。違ったものが和することによって新しきもの生むのであるぞ。奇数と偶数合わせて、新しき奇数生み出すのであるぞ。それがまことの和であり清めであるぞ。善は悪と、陰は陽と和すことぢゃ。和すには同じあり方で、例えば五と五との立場で和すのであるが、位に於いては陽が中心であり、陰が外でなければならん。天が主であり地が従でなければならん。男が上で女が下ぢゃ、これが和の正しきあり方ぞ。さかさまならんぞ。

これを公平と申すぞ。口先ばかりで良いこと申すと悪くなるのぢゃ。心と行いが伴わねばならん。判りきったこの道理が行われぬのは、そなたを取り巻く霊の世界に幽界の力が強いからぢゃ。そなたの心の大半を幽界的なもので占めているからぞ。己自身のいくさまだまだと申してあるがな。このいくさ中々ぢゃが、正しく和して早う弥栄結構ぞ。そなたの持つ悪い癖を治して下されよ。そのくせ治すことが最も大切な御用でないか。これに気付かねば落第ぞ。

おそれてはならん。おそれを生むからぞ。喜べ、喜べ、喜べば喜び生むぞ。喜びは神じゃ。神様ご自身も刻々弥栄して御座るぞ。故にこそ生長なされるのぢゃ。人間も同様でなくてはならん。昨日の自分であってはならん。今の自分ぞ。中今のわれに生きねばならん。われにどんな力あったとて、我を出してはならんぞ。我を出すと力なくなるぞ。我を、大き我に昇華させよ。大我に溶け要らねばならん。大我にとけいったとて、小我がなくなるのではないぞ。人おろがめよ。物おろがめよ。おろがむと自分の喜びとなり、捧まれたものも喜びとなるぞ。嬉し嬉しとはそのことぞ。

・・・その29に続く

その29

ひふみ神示9 月光の巻き サブタイトル祓いと調和

「木にも竹にも石にも道具にもそれぞれの霊が宿っているのである。人間や動物ばかりで無く、全てのものに宿っているのである。宿っているのであると云うよりは、霊と体とで一つのものでできあがっているのである。一枚の紙に裏表あるようなもの、表ばかりのものも無い。裏ばかりのものも無い道理。数字にも文字にもそれぞれの霊が宿っており、それぞれの能しているのであるぞ。順序がわかれば初段、和にてすれば名人。

山も自分、川も自分、野も自分、海も自分ぞ。草木動物悉く自分ぞ、歓喜ぞ。その自分出来たら天を自分とせよ。天を自分にするとムにすることぞ。〇に化することぞ。ウとムと組み組みで新しきムとすることぢゃ。」

読み解きます ちょっと難解

今までの内容にも合ったようにこの地上界のもので総て霊と物質からなっている。だから木にも竹にも石にも道具にも霊が宿っているといっている。霊と物質で一つのものが、できあがっている。

更に数字（数霊はお聞きされる方も多と思います。）にも文字（古代の神代文字のこと 言霊を霊的に感得する文字龍形文字のことか）にもそれぞれの霊が宿っており、それぞれの働きをしている。

順序が判れば初段（これは霊が主で身体が従が判ればの意味か）、和にてすれば名人（霊と体が和すれば「調和」名人と云うことか）

山も自分、川も自分、野も自分、海も自分ぞ。草木動物悉く自分ぞ、歡喜ぞ、総て外の自分、歡喜のキで統一されるもの それが出来たら天を自分とせよ（天と自分が一体となったこと）

天は心の世界＝神界で天を自分にすると神と一体となった自分 ムにすること自我が無く身体だけがあり空になること。常に空になった自分にムの神が入り（神と一体となり）組み組みで新しき神となる。

今のところはこのレベルしか読めないです。

・ ・ その30に続く

その30 ひふみ神示9 月光の巻き サブタイトル祓いと調和

「払いは結構であるが、役はらいのみでは結構とはならんぞ。それは丁度、悪を無くすれば善のみの地上天国が来ると思って、悪を無くすることに努力した結果が、今日の大混乱を来したのと同じであるぞ。

よく考えてくださいよ。善と申すも悪と申すも、みな悉く太神の肚の中であるぞ。太神が許し給えばこそ存在しているのであるぞ。この道理よく会得せよ。

はらうと申すのは無くすることではないぞ。調和することぞ。和して弥栄することぞ。

厄も祓わねばならんが、福も祓わねばならん。福祓いせよと申してあろうが。厄のみで祓いにならん。福のみでも祓いにならん。厄払いのみしたから今日の乱れた世相となったのぢや。このわかりきった道理が何故に判らんのか。悪を抱き参らせよ。善も抱き参らせよ。抱くには〇にならねばならんぞ。」

その30

払うと云うことは調和すること、つまり人間には三種の神器が備わっており、魂と剣と鏡の三種である。

魂とは心、剣とは自分から外に出て行くキの流れ（真善美愛）、を仮にプラスとしよう、鏡とは外から自分に入ってくるキの流れは（偽悪醜憎）、マイナスになる。剣になるのは心が光りに向かう時の状態、鏡になるのは心が内に向かうつまり影に向かう状態

つまり陰と陽の世界にいる人間が、心で描く内容によって、出て行くキの量、と入ってくるキの

量に分けられこれが調和することを意味する。これを祓うという。

偏らずに和して弥栄に向かうこと だから厄も福も祓うとっている。偏ると世相が乱れると、これは驚きですね、

抱くには〇にならねばならんぞ。つまり我を無くし心を下肚に鎮め何も考えてない状態つまり中今の状態にせよということ。

・ ・ その 31 に続く

その 31 ひふみ神示 9 月光の巻き サブタイトル祓いと調和

「心の入れ替えをせよとは、新しき神界との霊線をつなぐことぞ。そなたは我が強いから、私の強い霊界との交流がだんだんと強くなり、私の虫が生まれて来るぞ。私の病になって来るぞ。その病は自分ではわからんぞ。訳のわからん病流行るぞと申してあるがそのことぞ。肉体の病ばかりでないぞ。心の病はげしくなっているから気づけてくれよ。人々にもそのこと知らせて共に栄えてくれよ。その病治すのは、今日までの教えでは治らん。病を殺してしもうて、病を無くしようとして病は無くならんぞ。病を浄化しなければならん。悪を殺すという教えや、やり方ではならんぞ。悪を抱き参らせて下されよ。

」

読み解きます

新しき神界と霊線をつなぐとは、我善しの思いで生活している状態を、光りに向かい大我に生きよということ。(総てのものを育む) 次のフレーズは何か今の状態を預言しているようなことが書かれています。

そなたは我が強いから、私の強い霊界との交流がだんだんと強くなり、私の虫が生まれて来るぞ。私の病になって来るぞ。その病は自分ではわからんぞ。訳のわからん病流行るぞと申してあるがそのことぞ。これは新型コロナウイルスを預言しているように思います。

その病治すのは、今日までの教えでは治らん。病を殺してしもうて、病を無くしようとして病は無くならんぞ。病を浄化しなければならん。悪を殺すという教えや、やり方ではならんぞ。悪を抱き参らせて下されよ。

これはとんでもないことを云っています。この病は今までの医学の治療では治らないとっている。病を殺しても無くならない。病を浄化しなければならん。悪を殺すという教えややり方ではならんぞ。悪を抱き参らせて下されよ。今までの文面から病を浄化するとは、病は自分に向かう氣の流れで、それを浄化するにはその逆の氣の流れつまり自分から出て行く氣の流れで調和すること。つまり心の向ける方向を光りにして常に氣を出すことが抱き参らせることになるということ。

・ ・ その 32 に続く

その 32 ひふみ神示 9 月光の巻き サブタイトル祓いと調和

「考えていたのでは何も成就せんぞ。神界と交流し、神界に生き、神界と共に弥栄すればよいのぢや。

人間だけの現実界だけで処理しようとするのが今までの考えぢや。今までの考えでは人間の迷いぞと申してあるがな。迷いを払って真実に生きよ。みたましづめぢや。神しづめぢや。そなたは信仰

のあり方を知らんぞ。長い目で永遠の立場からの幸せが、歓喜がおかけあるぞ。局部的一時的にはいやなことも起こって来るとぞ。天地を信じ、自分を知り、人を理解するところにこそまことの弥栄あるぞ。だますものにはだまされてやれよ。ひとまずだまされて、だまされんように導いて下されよ。そなたはそんな場合に我を出すからしくじるのぞ。だまされてやろうとするからカスが残るのぞ。まことにだまされる修業が大切ぢやなあ。」

読み解きます。

とても大事なこと 「考えていたのでは何も成就せんぞ。」これは月夜見の世界つまり頭で思考を巡らすことをいくらやっても何も成就しないと云っている。「古事記と言霊」の島田正路氏の説明によれば、「欲望」言霊ウの世界「科学・学問」言霊オの世界、この二つ世界が「二つの人間の意志の使い方が」今の混乱の世を作り上げました。これは素戔嗚の世界のハタラキです。

しかしながらそのおかげで物質科学が進歩し沢山の恩恵を受けることが出来ました。しかしこの欲望と、科学の世界は世の中に暗黒と破壊をもたらしています。「神界と交流し、神界に生き、神界と共に弥栄すればよいのじゃ」そこで言霊アの世界は「宗教・芸術」の世界は「心の安らぎを求めた結果得られる思想の世界」思想の世界で何も成就しないが、一時的には心の安らぎは得ることが出来ます。そのため世界にそれぞれの宗教あります。ですがそれでは何も変わりはないといっています。次のステップとして言霊エの世界「実践知の世界」本当の意味の「政治・道徳・倫理の世界」の実践が必要

「神界と交流し、神界に生き、神界と共に弥栄すればよいのじゃ」ととても大事なことを言っています。先ず神界と交流するには意識を下肚に集め自分の我を無くします。その状態で日々の生活に、時所に応じて言霊ウ、言霊オ、言霊アの世界を選んで行動します。これを実践知の世界と云います。ただしその選ぶときの自分の状況が神界と交流している状態でないと駄目なのです。つまり下肚に意識を集めると自分の我がなくなります。その状態で光りに向いた心の状態で日々の出来事一つ一つに心と身体を全て向けていきます。その時何か問題が起こったとき自分に湧いてくる思いに従い動くことです。これが実践知の世界です。

もう一つ大事なことをひふみ神示は云っています、毎朝神に感謝、先祖霊に感謝、次に自分の目指すものを5・7・7の神のリズムに落とし込んで言葉で宣うことで自分の無意識に働きかけることが前提です。この作業が自分の身体が空の時に入ってくる神を選ぶことになります。

あとは中今の状態で日々心と身体を眼の前の一つ一つのこと100%向けていくことです。「この中今の精神と身体の状態動きを稽古するのが合氣の道です」

人間だけの現実界だけで処理しようとするとは、言霊ウと言霊オの世界で日々の行動を決めて動くことを意味します。それは迷いの中なので、みたましづめ、神しづめじゃといっています。心を鎮めて空となりなさいです。局部的には嫌なことが起こってきても、永遠の立場から幸せ歓喜が、おかけがあると云っています。天地を信じ、自分を知り、人を理解するところに弥栄あるぞ、つまり空になって自分に神が入ったその神に行動を任せなさい。人を理解するところに弥栄あるぞ。

だまそうとしている人を理解するにはだまされるがいいと、そのあとだまされないように導けと、とんでもないことを云っている。

・ ・ その33に続く

その 33 ひふみ神示 9 月光の巻き サブタイトル祓いと調和

「そなたはつまらんことに何時も心を残すからつまらんこと出てくるのであるぞ。心を残すということは、霊界とのつながりあることぞ。つまらん霊界にいつまでくっついていてのぢや。何事も清めて下されよ。清めるとは和することであるぞ。同じもの同士の和では無い。違ったものが和することによって新しきもの生むのであるぞ。奇数と偶数合わせて、新しき奇数生み出すのであるぞ。それがまことの和であり清めであるぞ。善は悪と、陰は陽と和すことぢや。和すには同じあり方で、例えば五と五との立場で和すのであるが、位に於いては陽が中心であり、陰が外でなければならん。天が主であり地が従でなければならん。男が上で女が下ぢや、これが和の正しきあり方ぞ。さかさまならんぞ。

これを公平と申すぞ。口先ばかりで良いこと申すと悪くなるのぢや。心と行いが伴わねばならん。判りきったこの道理が行われないのは、そなたを取り巻く霊の世界に幽界の力が強いからぢや。そなたの心の大半を幽界的なもので占めているからぞ。己自身のいくさまだまだと申してあるがな。このいくさ中々ぢやが、正しく和して早う弥栄結構ぞ。そなたの持つ悪い癖を治して下されよ。そのくせ治すことが最も大切な御用でないか。これに気付かねば落第ぞ。」

読み解きます

心を残すとは霊界とのつながりあるぞ。これは自分の我思いが引き寄せている霊界との意味です。何事も清めてください。清めるとは和することであるぞつまり我善しの行動は氣の流れが自分に向かうもの、自利の行動です。他利の行動は氣の流れが外に向かうもの。

自分に向かってくる氣の流れこの量とは悪い知らせ これを受け入れ流す量と光りに向いて氣を出すことで外に向かう量の総和が釣り合うことが清めること

違ったものが和すことによって新しきもの生むのであるぞ。なかなか簡単ではないが、奇数と偶数 例日本人と外国人 善と悪 例平和主と戦争 陰と陽 表の世界と裏の世界、陽が中心、天が主つまり思いが主 地が従つまり身体が従 男が上で女が下（父韻と母音の関係）父韻の発音があってその後母音のひびきが来るのが言霊

この状態が公平と云っている。つまり家族の姓も男の姓を名乗るのはここからの流れ、家族の姓を別々にすると霊的な世界も別の次元の霊同士が同じ所に入れられるため争いが絶えなくなるようです。

自分の中の我善しを改め神界との交流が可能な心の状態となれと云っている。それが己自身のいくさが済んでいない。早く我善しを改めよとのこと。

・ ・ その 34 につづく

その 34 ひふみ神示 9 月光の巻き サブタイトル祓いと調和

「おそれてはならん。おそれを生むからぞ。喜べ、喜べ、喜べば喜び生むぞ。喜びは神じゃ。神様ご自身も刻々弥栄して御座るぞ。故にこそ生長なされるのぢや。人間も同様でなくてはならん。昨日の自分であってはならん。今の自分ぞ。中今のわれに生きねばならん。われにどんな力あったとて、我を出してはならんぞ。我を出すと力なくなるぞ。我を、大き我に昇華させよ。大我に溶け要ら

ねばならん。大我にとけいったとて、小我がなくなるのではないぞ。人おろがめよ。物おろがめよ。おろがむと自分の喜びとなり、拝まれたものも喜びとなるぞ。嬉し嬉しとはそのことぞ。」

読み解きます

「おそれてはならん。おそれを生むからぞ。喜べ、喜べ、喜べば喜び生むぞ。喜びは神じゃ。神様ご自身も刻刻弥栄して御座るぞ。故にこそ生長なされるのぢや。人間も同様でなくてはならん。昨日の自分であってはならん。今の自分ぞ。中今のわれに生きねばならん。

自分の今の思いが全てを創る。自分の心がアクセスする霊界からの反射を受ける。おそれはおそれを、喜びは喜びを、「昨日の自分であってはならん。今の自分ぞ。」とは今身体に現れ出ているのは昨日の自分。今、昨日の自分を嘆いてはならん。 未来の自分を創るのは今の自分。今という瞬間に過去と今と未来があります。また前にも読み解きで書きましたが、明日のことにも心使うなよとも云っています。(起こってきてもいない未来のことを心配する取り越し苦労のこと、今この時この場に心を置き「古来日本では中今といわれました」それに心と身体を向けよ、そして良心の納得するよう動けということ)

中今がとても重要です

「中今のわれに生きねばならん。われにどんな力あったとて、我を出してはならん。我出すと力なくなるぞ。我を大き我に昇華させよ。大我に溶け要らねばならん。」

中今とは今という瞬間に生きよということ、これこそ合氣道の稽古の目指すところです。心(意識)を下肚に集めつづけて、頭で考えない状態を創ること、そうするとそこで瞬間瞬間に思う動作に氣の流れが伴う。言霊を発した時にその言霊の持つ氣が自由に通うようになる状態とでも云えましょう。

さらに何も頭で考えていない状態なので空の身に神(神のキが)が入って活動するだから我が入ってはならんです。我が入るということは頭で考えていると云うこと(その時は筋肉力たよりとなる)、それでは(神のキの)力なくなると云っている。

大我とは自我を超越し、全体的で一体的な立場に立つ世界観に生きることと辞書にあります。神の心になれと云うことでしょうか。人も物も拝みなさいと、おろがむと自分の喜びとなり、拝まれたものも喜びとなるといっている。

(おろがむとは拝むの原型のようです。)

・ ・ その 35 に続く